

博士學位論文要約

論文題目：日本古典芸能と中国文学—催馬楽・今様・能をめぐって—
氏名：松沢 佳菜

要約：

日本古典文学は中国文学から多大な影響を受けており、その影響の指摘も、中世歌学の時代から伝統的に行われてきた研究方法である。しかし、古典芸能を対象とした和漢比較文学的研究は、従来比較的手薄になってきた。また諸芸能の実態を視野にいたした和漢比較文学的研究は、その資料の不足からほとんど行われていないと言って良い。

本論文は中世以前の代表的な古典芸能である催馬楽・今様・能などを対象として中国文学の典拠を調査し、その共通点と日本文学作品の独自性及び各芸能における中国文学の影響の諸相を検証し、また中国古典舞踏の日本への影響の可能性を論じたものである。

第一章「催馬楽と中国文学——催馬楽における漢文的教養の投影」では、一般に庶民性を強調されることが多く、漢文の影響はほとんど見られないとされてきた催馬楽の詞章中に、漢文由来の表現が見出されることを指摘し、催馬楽の多面的な性質及び詞章の成立圏の一端を明らかにする。具体的には催馬楽「浅緑」「大路」を対象として、魏晋南北朝詩・初唐詩を中心とした中国詩、上代・平安漢詩との比較を行った。

第一節「催馬楽「大路」——「青柳が花」と「柳花」」では、催馬楽「大路」と楽府詩との関連を指摘する。「大路」は都大路に沿って柳が立ち並ぶ風景を詠い、都の春とその繁栄を讃えた催馬楽である。当該歌謡については一条兼良『梁塵愚案抄』以来注釈が行われてきたが、詞章中の「青柳が花」の解釈が問題となってきた。歴代注釈中で最も有力なものは「青柳が花」が「青柳の美しさの比喻」であるとする解釈である。しかし平安期の和歌を対象として「青柳が花」に類する表現を検索すると、「青柳が花」に類する表現を以て「青柳の美しさの比喻」を表すと確定できる用例は検出できない。本節では都大路の春景を歌うという当該歌謡と類似する詩が、本朝に影響甚だ大であった『玉台新詠』等の詩集に収められた楽府「洛陽道」等に見出されることから当該歌謡が漢詩的な発想を背景に持つことを明らかにした上で、「青柳が花」の語は中国詩及び平安期漢詩中で多用され、帝都の春を象徴する「柳花（＝しだれ柳の花）」を典拠とする表現であることを指摘した。

第二節「催馬楽「浅緑」——漢詩における君主賛美との関わり」では、催馬楽「浅緑」に見られる漢文的題材及び嵯峨朝詩壇の特徴的表現との関連を指摘する。催馬楽「浅緑」は前半部に都大路の春の華麗さを歌うが、後半部の秋の植物が列挙される部分前後の解釈が一致を見ず、そのため歌謡全体の主題解釈も錯綜してきた。本節では「浅緑」後半部の「からほひ（唐葵）」の平安中期までのほぼすべての用例が『文選』所収「園葵詩」「求通親親表」等の漢詩文を典拠として、君主への忠誠というイメージを伴うこと、当該歌謡は後半部に秋の景物とともに「しだり柳」を並列するが、嵯峨朝漢詩中に秋の柳を題材として君主賛美を行う表現が見出せること等を明らかにし、当該歌謡の主題は君主賛美と平安京賛美であることを論証した。また「浅緑」の難読部分「またはたみとなる」の部分について、魏晋南北朝詩において帝都の風景描写に「井」が用いられることから「またはた井戸なる」と校訂すべきことを示した。

第二章「今様と中国文学——今様に投影された世界像」では今様と中国説話との関わりについて考察し、また典拠調査を踏まえてそれぞれの歌謡の配列意図についても検討を加え、今様においては歌謡の背景となる世界観を構成するために中国文学がより大きな役割を果たしていることを指摘した。

第一節『梁塵秘抄』二七七番歌と深沙大王伝承』では、『梁塵秘抄』二七七番歌の背景にある伝承を明らかにし、また当該歌謡の配列意図を検討した。『梁塵秘抄』二七七番歌は玄奘三蔵と彼の西天取経に関わる伝承に登場する深沙大王について歌った歌謡である。先行研究において深沙大王は、流沙で行き倒れた玄奘に水を与えて窮地を救った神としてのみ説明されてきた。この説は『大慈恩寺三蔵法師伝』を根拠とし、同書自体には深沙大王の名は出ないものの、日本の仏書『阿婆縛抄』所引『大聖深沙神記』等にこの神を深沙大王と関連付ける伝承が見られ、『大聖深沙神記』が承和遣唐使によって将来された点から、晩唐に流布した深沙大王伝承が日本に伝えられた可能性が『梁塵秘抄』中の般若経歌研究の立場から指摘されている。しかし一方で『大唐三蔵取経詩話』が載せる深沙大王の別伝承が中国に存在し、日本にも流布している。この伝承では深沙大王が玄奘の渡天を数度にわたって妨害した神で、玄奘の前世の髑髏を身に付けているとする。この説は『四十帖決』、『覚禅抄』、『阿婆縛抄』等の仏書に載る。つまり深沙大王が玄奘に水を与えたとする説と渡天を妨害したとする説の両者が日本に伝わっており、当該歌謡はこの二種類の伝承を共に考慮に入れて解釈すべきであることを指摘した。また深沙大王伝承の舞台である「流沙」の用例に着目し、二七七番歌が「仏歌十二首」の冒頭に配列された意味について検討した。

第二節『梁塵秘抄』三四六番歌と蓬莱信仰』では、従来難読歌とされてきた『梁塵秘抄』三四六番歌について読解を試みたものである。当該歌謡は靈山を歌った三四四番歌・三四五番歌と海に関係する歌謡群の間に配置されており、配列上、靈山の歌謡と海の歌謡とを繋ぐ重要な役割を果たしている歌謡であると考えられる。先行研究においては、特に第一句目の「ふんのとり」及び最終句の「セハすのねがいはいちぬらむ」の解釈をめぐるさまざまな解釈が提出されてきた。本節では、直前に並べられた三四五番歌との関連から見て、当該歌謡は蓬莱信仰を背景に持つ祝言歌謡であると考え、「ふんのとり」を蓬莱山に住む鴛鴦に比定する。また祝言歌謡であるという点から見て、最終句を「千秋の願いは満ちぬらむ」とする説を支持する。またこの解釈から考え得る該当部分の配列意図を考察する。

第三章「能と中国文学——典拠からの飛躍及び芸態上の中国古典文学の影響の可能性」では能と中国文学の関わりを考察する。能には唐物の曲が多く含まれるため、他の芸能に比較すると和漢比較文学研究の蓄積が多くあるが、未指摘の典拠も多く残されている。また能楽の場合、歌謡と比較するとまとまった内容を持ち、演劇化にあたって複数の故事が組み合わせられている場合が多いため、中国文学の影響の諸相を検討するために適した素材であると言える。

第一節「能〈項羽〉とその典拠——垓下の城と「緑珠墜楼」」では、能〈項羽〉の典拠の典拠について考察する。能〈項羽〉は西楚の霸王・項羽と愛妾虞氏が漢の高祖・劉邦によって追い詰められ、二人がそれぞれ最期を迎えるまでを題材としている。項羽の幽霊である前シテが登場したのち、後場で項羽（後シテ）と虞氏（後ツレ）の最期のありさまを見せるが、虞氏が垓下で高楼から投身して果てたことになっており、「項羽本紀」及び中国文学における虞氏の最期に関する説や、『太平記』・朗詠注・抄物にある類話との食い違いが指摘されてきた。本節では、『太平記』等の日本の典拠資料において項羽が最期を遂げた烏江が川として想像されており、虞氏が自害した垓下は烏江のほとりの城として想像されていたことから、妓女が川辺の城から投身する『蒙求』緑珠墜楼の故事が虞氏の最期の描写に影響を与えた可能性を指摘した。

第二節「能〈邯鄲〉とその典拠——玄宗関連説話の撰取と霓裳羽衣舞の揺曳」では、能〈邯鄲〉の典拠を分析すると共に、玄宗が月宮で霓裳羽衣舞を舞うというモチーフが『教訓抄』記載の中国伝来の舞楽と一致する可能性があることを指摘する。

〈邯鄲〉の筋は以下のようなものである。仏道を志す青年盧生（シテ）が楚国へ向かう途中、邯鄲で宿をとるが、そこで「邯鄲の枕」を用いて眠ったところ、夢中で楚国の帝位に即き、不老不死を得る。やがて夢は覚め、人生の儚さを悟った盧生は故郷へと帰る。この話は「枕中記」を原拠とし、『太平記』や朗詠注に載る類話の系統を引くとされるが、夢中の帝王即位と登仙等の描

写が、関連する資料とは異なることが問題となってきた。本節では夢を見せる枕に関わる中国故事には、「枕中記」以外にも、玄宗が所有していたとされる「遊仙枕」に関わる説話（『開元天宝遺事』）があることに注目した。「遊仙枕」説話は日本の五山僧の漢詩中にも引用されているが、この枕は皇帝の所有であり、かつ仙界の夢を見せる枕であるという点で〈邯鄲〉の帝王遊仙というモチーフに影響を与えた可能性があることを指摘した。また玄宗が霓裳羽衣舞を舞うという発想が『教訓抄』記載の「霓裳羽衣舞」に見られることを踏まえ、芸能の和漢比較文学的考察の可能性を探った。

本論文で取り上げた古典芸能は中国文学摂取においてそれぞれに特徴を持つ。催馬楽では中国文学の影響は詩語や詩想の利用に留まっていたが、今様における中国文学は背景となる世界像を支える根拠となっており、能では複数の故事や外来芸能の芸能を組み合わせることによって新たな物語や表現を創出している。このような中国文学摂取のありかたの差は、それぞれの芸能の性質の違いに拠るところが大きいであろうが、時代とともに徐々に広く伝播していった中国文学を、日本古典芸能がより深く理解し、取り込んでいった過程を示すものでもあるだろう。さらなる個別的な検討が必要であろうが、本論文で示した内容は、日本古典芸能における中国文学の影響の諸相を考える一助となると考えられる。